

頭痛

論曰、内經云、新沐中風、則爲首風、首風之狀、頭面多汗、惡風、當先風一日、則病甚、頭痛、不可以出内、至其風日、則病少愈、夫諸陽之脈皆會於頭、平居安靜、則邪無自而入、新沐之人、皮膚既疎、膚髮濡漬、不慎於風、風邪得乘之、故客於首而爲病、其證、頭面多汗、惡風、頭痛、不可以出内者、以邪氣之客也、當先風一日、則病甚、至其風日、則少愈者、陽之氣、以天地之疾、風名之、風行陽化、頭者諸陽之會、與之相應也。

〔五體身分集上〕頭痛分
頭風治方云、頭風トハ、頭痛、目クルメキ、面フルイ、風吹、天クモル時ハ、彌頭鼻痛トミヘタリ、

〔撮壤集下〕頭痛

〔瘍科秘録八〕頭痛

頭痛、左カ右カ一方ニ限リテ痛ムヲ偏頭痛ト爲シ、百會天庭及ビ鼻梁骨ノ痛ムヲ正頭痛ト云フ、至テ治シ難キモノナリ、多クハ宿疾ニナリ、氣候ノ寒暄ニ移リ、或ハ風雨ノ催ス前ニ發スルモノナリ、發スルコト瘧ノ如ク、時ヲ期テ痛ミ、時ヲ期テ止ム、多ハ平旦ニ發シ、午後ニ至レバ止ムモノナリ、

眩暈

〔大猷院殿御實紀附録一〕廿に一二あまらせ給ふ頃、眩暈をやませられ、名ある薬師ども日夜伺公して、御薬奉りけるに、少しさはやがせ給ひ、御食進ませられしかば、老臣等みな悦あへり、そのとき岡本玄治、諸品をめして、食の進むは如何にと御尋なり、玄治、命は食に在と申せば、何の病にも食す、み候へば、自然と愈るものにて、君の御病も日をへて御平快有べしと申す、公の仰に、そは汝が心得違なり、おほよそ人食足らざれば、形状おとろへ、飽過れば、脾胃をそこなふゆへに、足らず過す程よく用ゆれば、一身を養ふゆへ、命は食に在とはいふなり、玄かざるをた、おほくのみくらふをもてよしとおもふはいとひが事なりとのたまひければ、玄治感服して、只今の台命により、はじめて古語の深長なる理をわきまへ侍りぬとて、御前を退きしとなり、名將名言記、